

認定NPO法人 わだつみのこえ記念館

記念館だより

Museum Watatsuminokoe Newsletter

No. 14
2020.5.31

「戦没学徒と岩手農民兵士の軍事郵便展」開催報告

館長 山辺 昌彦

展示の概要

今回の企画展は館蔵の戦没学徒の軍事郵便と、北上平和記念展示館から借用した岩手県の農民兵士の軍事郵便を展示しました。北上平和記念展示館は、もともと岩手県和賀郡藤根村の藤根小学校の先生や藤根青年学校の指導員をつとめ、卒業生の兵士に『真友』という新聞を作り送っていた高橋峯次郎宛の返信「七〇〇」通の軍事郵便」を収蔵し、その一部を展示している施設です。

岩波新書『戦没農民兵士の手紙』は農民兵士と学徒兵ということ、『きけわだつみのこえ』と対比して語られる遺稿集ですが、これを編集した「岩手県農村文化懇談会」が収集し保管していた「戦没農民兵士の軍事郵便」が二〇一九年に北上平和記念展示館に移管されました。しかし、刊行後返却された軍事郵便もあって、全てが保管されていたわけではありませんでした。これら二種類の岩手県の農民兵士のうち一部を借用し展示しました。

「戦没農民兵士の軍事郵便」については、わだつみのこえ記念館の特別

「戦没学徒と岩手農民兵士の軍事郵便展」開催報告

館長 山辺 昌彦

展で展示したことがあります。一方「七〇〇」通の軍事郵便」については、一九八一年に岩手・和賀のペン（代表 故菊池敬一氏）が軍事郵便の調査活動を始め、その成果が一九八三年には菊池敬一著『七〇〇』通の軍事郵便 ―高橋峯次郎と農民兵士たち』が柏樹社から、一九八四年には和賀のペン編『農民兵士の声がかきこえる―七〇〇』通の軍事郵便から』が日本放送出版協会から、それぞれ刊行されました。それより前の一九八二年九月には、NHK特集「農民兵士の声がかきこえる ―七〇〇」通の軍事郵便から」のテレビ番組も作られました。

国立歴史民俗博物館はこれを素材に共同研究「近代の兵士の実像」を一九九六年度～二〇〇〇年度の間に実施し、その成果として『国立歴史民俗博物館研究報告第一〇一集「共同研究」近代の兵士の実像―村と戦場』を二〇〇三年三月に刊行しています。しかし、今まで北上平和記念展示館以外では展示したことがなく、東京はもちろん、館外での初めての展示でした。企画展は、二〇二〇年一月二二日



撮影/斎藤 尚義

二月二十九日の会期で開催し、期間中の月、水、金、土曜日の午後、一時～四時の時間で開館しました。企画展の趣旨は、軍事郵便を読んでもらうことによって、日本の悲惨な戦場の実相や兵士たちの家族への思いを知り、考えていただくことにあります。期間中の来館者は一七〇人でしたが、熱心に軍事郵便を読んでいただきました。会場はわだつみのこえ記念館二階展示室でしたが、常設展から戦没学徒の遺稿を撤去し、かわりに軍事郵便を展示しました。

展示の構成

企画展では四八八五一点の軍事郵便を展示しました。内訳は第1部のわだつみのこえ記念館所蔵軍事郵便が二〇人二〇点です。軍隊時代の書簡・葉書を各人一点ずつ選んで展示しました。戦没学生の軍事郵便のほとんどは遺族や知人からわだつみのこえ記念館に寄贈された現物の資料です。時期的には日中戦争期のは少なく、多くは学徒出陣前後の太平洋戦争後期の若い学徒兵のものでした。学徒兵のものには検閲を逃れるために、兵舎から外出した際に出された郵便もあります。

入館案内

開館日 月・水・金
(祝日・夏季・冬季休館あり)
時間 午後一時～四時
*団体の場合は別途考えますので曜日・時間等ご相談ください。
入館料 無料
*エレベーターもあります。
*資料閲覧・映像の視聴は事前にご連絡ください。
*アクセス 地下鉄丸の内線・大江戸線「本郷三丁目」下車七分



第2部は高橋峯次郎宛の「七〇〇」通の軍事郵便」のうち、二一人二三点の軍事郵便を展示しました。「七〇〇」通の軍事郵便」は量が膨大であり、先生宛ということもあって、その中には戦争の悲惨な実相や農民兵士たちの思いが書かれた軍事郵便があります。それらを北上平和記念展示館の展示や国立歴史民俗博物館研究報告に載っている翻刻を参考に選んで展示しました。多くは中国戦線の山西省など華北で書かれたものですが、海軍の軍事郵便、国内の空襲について書かれたもの、インドシナ、「満州国」でのものや、シベリア出兵の時のものもあります。

没農民兵士の手紙」を読んで、展示資料を選びましたが、現物がなくてお借り出来ないものもありました。また、逆に収集したが、『戦没農民兵士の手紙』に掲載されなかった軍事郵便もあって、そこからも選んで展示しました。その中には東京外国語学校から学徒出陣して飛行部隊に入り、後にフリーピンで戦病死した学生の軍事郵便葉書もありました。

企画展で展示した軍事郵便の写真と本文の翻刻、および兵士の履歴を収録した図録を刊行しました。図録は会期終了後も引き続き、わだつみのこえ記念館で販売していますので、一部七〇〇円でお買い求めいただけます。

わだつみのこえ記念館の企画展に先だって、北上平和記念展示館は「三つの著名な兵士の手記と軍事郵便展」を二〇一九年七月一七日～八月二十五日の会期で開催しました。ここでは「七〇〇」通の軍事郵便」と「戦没農民兵士の軍事郵便」とともに、「戦没学徒の遺稿」のパネルも展示されました。

1. わだつみのこえ記念館所蔵軍事郵便	2. 藤根小学校・藤根青年学校(藤根地区)と高橋峯次郎宛の軍事郵便	3. 岩手県立陸軍中隊(岩手県)の軍事郵便
4. 岩手県立陸軍中隊(岩手県)の軍事郵便	5. 岩手県立陸軍中隊(岩手県)の軍事郵便	6. 岩手県立陸軍中隊(岩手県)の軍事郵便

2020年企画展
「戦没学徒と岩手農民兵士の軍事郵便展」
(A 4判・48頁・頒価700円)

本の紹介
『林尹夫日記 完全版』

本書は、京都帝国大学文学部史学科に学び、一九四三年、「学徒出陣」により海軍航空隊員となり、終戦直前の四五年七月、大阪空襲の防衛出動で戦死した林尹夫の日記を復元したものである。戦没学生の個人遺稿集に優れたものは少なくないが、林尹夫の日記が貴重なのは、学生時代から海軍航空訓練時代を経て戦死直前まで記された系統的な読書記録であるところにある。学徒兵は軍隊内では勉学上の読書は禁止され、活字と

教養に飢えるが、兄克也氏、恩師深瀬基寛氏の支援もあり、軍隊内でも読書に励む。林は反戦思想、自由主義思想を明確にし軍隊規律を厳しく批判するが、同時に自らの属する世代が国家から「死」を求められている「宿命」を自覚する。

この葛藤が全体の基軸となつて学生時代の日記では、これが友情や自己嫌悪、級友への反発などと重なり、海軍内の日記では、軍隊規律の罵倒とともに、この愚かなる軍隊の背後にある「祖国」に自己や家族が帰属する矛盾に苦しむ。そして戦死直前、理論的には、ヨーロッパに学びつつ日本の歴史的發展に生きるべき「歴史学の学徒」たる自分が、実践的には「死」の宿命に従う苦悩にほとん

ど「狂気」に近い詩、解体する「祖国」への予言警句、を散りばめる。本書はこのような鮮やかな対比の三部作でもある。

林尹夫遺稿は、すでに一九六七年『わがいのち月明に燃ゆ』として筑摩書房より刊行されていた。しかしこれは兄克也氏により圧縮、編集されたもので、今回改めて三人社より原文遺稿をそのまま復元し、完全版とした。

現代に生きる若い人にとつては、直近の東日本大震災やコロナ感染こそ重要であろう。しかし「歴史に沈みつつある」戦争体験の記憶は重要である。七月刊行予定
(岡田裕之)

「ネットワーク」短信

庭園など38施設(当館も加盟)の合同イベント「文京ミュージアムフェスタ2019」が昨年12月19日(木)、ギヤラリーシビック(文京シビックセンター一階)にて開催されました。当館は佐々木八郎さんの遺稿を出展しました。来場者は五百名。今年度も参加を予定しています。

◆「文の京 平和マップ」

区内の平和関連施設・資料館、戦争関連跡地、モニュメント、被災樹木など22箇所の紹介マップです。当館と他館を組み合わせた見学企画に「文京ミュージアムネットワーク」

零 墨

「……小生昭南(シンガポール)に寄港以来、我(が)部隊の通訳を務め、任地に来て以来も専ら通訳及び翻訳、また現地民の監督に当つて居りましたが、最近当地方に民生部が創設され、私が指摘され今では部隊より離れて其の方の仕事に當つています。朝から晩まで、読む物、書く物、話す事皆々英語ばかりなのです。部隊に居た当時は全く専門の事はやりませんが、此処へ来てからは全く専門に属する事なので、仕事に力が入ります。当地の経済状態・商業状態・政治・民族の社会科学的の観察が只今の私の仕事となつています。殊に此の方面で専門は私唯一人と云ふ有様なので、任務責任重大なると共に多忙なる事御想像以上で

す。……」

右は、英国領だったインド洋上の一ニコバル島を占領した陸軍部隊に一九四三年十月に配属され、間もなく同島に駐屯し軍政を布く海軍が新設した民生部に派遣された木村久夫(二等兵、四四年六月に上等兵)が吹田市に住む母・斐野へ宛てた軍事郵便往復はがき往信の一節である。

木村は一九一八年四月九日生れ、四二年四月に高知高校から京都帝大経済学部へ進学、半年後十月に召集され陸軍中部第三部隊に入営したが、直後に発病し大阪陸軍病院次いで同・金岡分院で療養。翌四三年九月にシンガポールへ出征している。

「昭和十八年九月十三日夜半。／南方出征の前夜に当りて之を読む。半途にして止むと雖も、矢張り著者らしき銘感を与へてくれた。然し今の私には多大の疑問を抱かせるものを


持つ。——これは、東京帝大経済学部での「平賀爾学」の一方当事者・土方成美門下で後継者の難波田春夫が同年四月に上梓した『戦力増強の理論』の目次扉に木村が書込んだ文言である。(高知大学附属図書館「木村久夫文庫」所蔵)

木村は高知高校卒業の前年末に刊行された同校『南溟報國會誌』創刊号に論文「転換期に立つ経済学序論——政治経済学論争に際して——」を寄せ、経済学史を論争史として素描・批判するこの論考において「経済学研究者の末席を穢す」自負とともに、「非常時と呼ばれ、世界新秩序の建設と呼ばれている如く、世界を挙げての転換期」に「新しき経済学を樹立せんとする」本論執筆への抱負を記していた。「木村久夫文庫」四六六冊(複本二冊)は、高校時代から大学、入営後も出征直前まで、

精神的に研鑽した労苦を辿る縁であるとともに、その蔵書への夥しい書き込みや傍線を判読することにより、彼の未公開の手記と併せて、彼の傑出した社会科学研究の輪郭と同時代思想史との相即を探る貴重な素材ともなる。

例えば、先の難波田の著書裏表紙見返しには、陸軍病院にて療養中の「昭和十八年六月丸善にて。難波田氏の旧著を偲びつゝ、(購入。)」と書き込まれており、繰返し読まれた痕跡のある難波田著『国家と経済』四巻と対比させるならば、難波田の「統制経済論から国体経済論へ」とも評すべき変節に対する木村の違和感を目次扉の先の寸評から読み取ることが出来る。同様にして、偶然に木村の遺品となった田辺元著『哲学通論』に対する彼の批判的思考を探り出すこともまた可能であろう。(寧)

2016年 開館10周年記念
「所蔵資料 特別企画展図録」
A4判/104ページ 頒価1300円



と「文の京 平和マップ」が参考になります。文京区の発行ですが、当館でも扱っていますのでご請求ください。

◆平和のための博物館・市民ネットワーク

第18回全国交流会は10月26〜27日、国立女性教育会館にて開催されました。このネットワーク参加各館(当館も参加)のニュースは、安齋科学・平和事務所(Anzai Science & Peace Office)のHPで日本語・英語で読むことができます。本年9月16日〜20日には、第10回国際平和博物館会議が「次世代への記憶の継承と平和博物館の役割」をテーマに開催予定でしたが、バーチャル・オンライン会議として開催することになりました。参加申込などは、主催のInternational Network of Museums for Peace (INMP、平和のための博物館国際ネットワーク)のHPをご覧ください。

常設展をみて

自分の死が近づいていることが分かって、最後に家族へと書いた手紙。自分が死と向き合った時に湧き上がってくる心の中の本音を感じて、胸が痛くなりました。今の私には想像を絶する程の覚悟だと思われまます。言葉にはなりません。私は学生の皆様にはやっぱり死んで欲しくなかったです。生きていて欲しかった。ただそれだけです。「戦争」が憎いです。して欲しくなかった。それだけです。(19.6.28 女性)

生徒たちの一言で表せない複雑な感情がとても心に刺さりました。無条件に戦争はいけないと書いて置きたいと思います。(19歳 中央大学生)

普通の兵隊さんと違い、これからの未来を担うために学んでいくはずの学生を、兵として殺すやり方に疑問を覚えました。どんなことがあっても、戦争を起こすことは、正義にはなり得ないと思いました。戦争が忘れられていく今、私たちの世代が後世に残していかなければいけないと思います。ありがとうございました。(14歳 女性)

原亮さんの展示を今回ショーケースの中に見て、丁寧に読む事が出来た。権力からの抑圧、強制の下、苦しむ姿が「ノート」に伺える。2014年頃、伺った時は気付かなかった。それほど変えていないとの展示内容ですが、来る度に気付く、打たれるものは異なるものだ。朝鮮学徒の展示も貴重だ。(71歳 退職者 女性)

やっとの思いで、この記念館を訪ねることが出来ました。若い時に『きけ わだつみのこえ』の本を涙を流して読みました。希望に満ちた学生を戦争に狩り出して、その命を失わせた、当時の日本の政治家は何を思っていたか。一この若者の手紙・手記を見て、唯々無念でたまらない。絶対に戦争はすべきでない。その為に国の政治家は心血を注ぐべきだ。その為に又、国民は政治家を選ぶべきだ。現在何となく戦争に手を付けようとしている者が居るような気がしてならない。若い世代は全く戦争の苦しみを味わっていない。知らないこと程、恐ろしいことはないと思う。何が何でも戦争に入らぬよう、国民一人一人が決心すべきだ。それでこそ戦没学生が救われると思うことだろう。(19.11.1 90歳 男性)

初めて来館しました。その人の息づかい、ぬくもりの感じられる貴重な展示、ありがとうございます。(19.11.14 女性)

大学の教授に教えてもらい足を運びました。貴重な資料を拝見及び拝読させていた

来館者の「感想ノート」より

だくことが出来て幸いです。こういった記録を風化させず、後世に伝えていくために、私たちは何をすれば良いのか。どう歴史と向き合っていけば良いのか。戦争責任は戦後70年以上経過した今も日本人の課題として残ります。残り続けます。悲しい、憎い、戦争は繰り返すものではない、そう感じたものを今後どう後世に語り伝えいくべきか、熟考に熟考を重ねていく所存です。(19.12.2 女性)

やっと訪問することができました。歴史の授業を担当する者の一人として、しつかり子どもたちに伝えていきたいと思えます。(20.3.23 高知県 男性)

2020年企画展「戦没学徒と岩手農民兵士の軍事郵便展」をみて

今回の展示会を知り、みにまいりました。文庫本の『きけ わだつみのこえ』は以前より読んでおりましたが、実際に書かれた文字を目にすることで、70年以上も前の出来事であることを忘れず、現代を生きる私たちと何ら変わることはない感情を持って、日々の喜びや悲しみをご家族や大切な人と共有する生活を送られていたことに、改めて深い悲しみを覚えます。多くの聡明な若者の命を死に追いやってしまった、当時の日本社会の有り様を考え続けることが、今を生きる私たちの使命だと思います。(20.1.25 女性)

大学時代に恩師に勧められて読んだ記憶がよみがえりました。間違いなく私の人生の糧となっております。実筆をこの目でみられたこと、感慨深いものがあります。残りの人生を悔いなく生きる、その時を大切に、今を大切に、そして命を大切にしていきたいと思えます。自分の子どもに、生徒たちに時期をみて伝えていきたいと思えます。朝つけたラジオ放送に感謝。関係される方々に感謝いたします。(20.1.25 男性)

大学在学中に、安斎育郎先生にわだつみ像についての解説を聞いて以来、初めて伺いました。戦場のリアルな状況を言葉に反映させようとしている。集中して読みました。戦争の実相を継承するのに、極めて重要な資料です。マルクス資本論や発達史の読破を勧める手紙は、それだけで緊張感が伝わってきます。岩手の皆さんの手紙は、戦争を肯定する教育の徹底と、それでは言い尽せない実態があったことが伝わってきます。(20.1.25 男性)

初めてこちらを訪ねました。元々史学を学んでおり、その影響で戦争について考えるようになりました。亡くなった祖父も戦争がきっかけで性格が変わったと聞きました。今私たちができること、それは戦争を二度とおこさない、国のために戦った人のために、後世につないでいきたいです。(20.1.31)

若者が20代、30代という若さで亡くなっているのも、痛ましいことですが、戦争を栄えあるたたかいであるかのように、国から刷りこまれてしまっている点も、悲惨だと感じました。だまされない国民にならなくては、と思います。(20.1.31)

いつの時代も戦争を始める人は戦地に行かない。行って苦勞するのは庶民。二度と為政者、国にだまされないようにしないと。大切な人が戦地に送られないように。(20.2.3)

兵士たちの生の声を見ることが中々ないので、手紙を通してそれが出来、大変貴重なよい機会でした。兵士もやはり人間味や家族への心配の気持ちを持つなど、一人の人間であると実感できました。(20.2.3)

戦場で書いた手紙の一言一言が胸にさりました。生きたかっただろうな。私、平和な世界で生きてこられたことを、あたりまえではないこと、戦争の悲惨さ、残酷さを心に刻んで過ごしていきます。しっかりと次の世代にも伝えていきたいです。(20.2.19)

今回初めて来館することが出来、ほんとうに良かったです。企画展のためか、参観者が多く、うれしく思いました。コロナウィルスで大騒ぎの昨今ですが、ついに昨日は首相の一言で全国の小中高校が長期間休校となりました。戦後一人の権力者の意志のみで、国の行き方を決めることを厳しく戒められてきたのに、又このような方向に向かうのではないかと不安になります。岩手の農民兵士のような純粋な人々が二度と犠牲にならないために、多くの人々に来館して欲しいと思えます。(20.2.29 茅ヶ崎市)

企画展最終日に見学することができました。学徒兵、農民兵と、軍事郵便が展示されていますが、若者の命は何も変わるものはありません。郵便に託した彼らの心情をできるだけ汲み取っていくことが大事だと思います。こうした展示を企画されたスタッフに感謝します。(20.2.29 福生市 70代 男性)

平和ミュージアムめぐり(7)

知覧特攻平和会館

那波泰輔

知覧特攻平和会館は一九八七年に開館をした。知覧が「特攻の地」になつていく端緒は、一九五五年の特攻平和観音堂の建立があげられる。特攻平和観音堂に隣接した場所に知覧町護国神社が移転(一九六〇年)したことにより、知覧の地域の記憶に「特攻」がより組みこまれていった。

さらに、作家の高木俊朗の『特攻基地知覧』(一九六五年)が「特攻の町」の知覧の知名度を押しあげた。高木は戦争末期に報道班員で知覧に滞在し、特攻隊員と交流を持つており、その体験もふまえて書きあげたのである。この本がベストセラーになったことで、全国的にも「特攻の町」として知覧は有名になり、地域もそれを内面化していく結果になった。

しかし、知覧を「特攻の町」として名を馳せさせた高木は、のちに、知覧町が特攻隊員の死を美化し、軍の暴力性などを隠蔽してしまつていく点を批判した。ここには、兵士の死を悼む際に、それを「どのように」悼むかという問題が表れている。

知覧は「特攻の地」であることを観光政策として据えていく。この方針には過疎化と茶業の衰退が関係していた。知覧の人口は一九七〇年には一万六千人程度と、その十年前と比較して、大幅に減少しており、知覧町もそれを深刻に捉えていた。また、知覧は戦後に紅茶生産に力をい

れていたが、鹿児島県が紅茶生産の奨励をやめたことで、知覧町はそれに対応しなければならなくなった。こうしたこともあり、知覧は「特攻の地」を観光の目玉とすることで、地域を活性化しようとしたのである。

このような背景から、観光政策の一環として、特攻関連のモニュメントや施設が建設されていった。一九七四年に特攻銅像「とこしえに」、一九七五年に特攻遺品館が建設された。特攻遺品館は入場者数を増やしていき、一九八七年にこの特攻遺品館を引き継ぐかたちで、現在の知覧特攻平和会館が開館したのである。「平和」は産業である「観光」と溶解させられていった。

「平和」という言葉でも、そこに意味されているものは多岐にわたる。私たちが「平和」と向きあうときに、「平和をどう祈念をしていくのか」が問われているといえるだろう。

開館日：年中無休(四月二十八日現在)は新型コロナウイルスの影響により休業中)

開館時間：午前九時～午後五時
入館料：大人五〇〇円、小人(小学生)三〇〇円

電話：〇九九三-一八三-二五二五
住所：〒八九七-〇三〇 鹿児島県南九州市知覧町一七八八-一 番地
アクセス：鹿児島中央駅から車で約一時間五分

集会報告

◆「12・1 不戦の集い 二〇一九」(2019/12/1)

記録映画「学徒出陣」上映
講演「「祈る天皇」を疑う」-「学徒出陣」76年後の天皇を考える」
講師 子安宣邦(日本思想史家)

◆フォーラム(2019/8/18)
講演 「元学徒兵の戦中・戦後」
講師 福田玲三(完全護憲の会)

わだつみフィールドワークの会と共催

短 信

◆「わだつみのこえ記念館」紹介

・週刊 東京大学新聞
「東大新聞オンライン」
<http://www.todai.shimbu.org/>

◆マスメディアへ協力

・NHKテレビ「おはよう!つぼん 李香蘭」(2019/7/31放映)
・NHKテレビ「首都圏ニュース845 ミュージカルわだつみのこえ 練習風景」(2019/10/21放映)
・NHKテレビ「首都圏ニュース845」戦地の兵士たちがふるさとへ送った「軍事郵便展」(2020/1/24放映)

・NHKウェブニュース(同)

・読売新聞「戦没学徒と岩手農民兵士の軍事郵便展」(2020/1/27)
・毎日新聞 同上(2020/2/16)
・朝日新聞 同上(2020/2/27)
・朝日新聞社の「全国平和資料館アンケート」(掲載：2020/1/14)

◆来館者

*2019年度は九四六人の来館がありました。

団体では、市川市退職教職員の会、比較文学を知る会、バンバンクラブ、劇団四季「李香蘭」出演俳優、東アジア(日中韓)青少年歴史体験キャンプ、文京フィールドワーク、侵略戦争を語りつぐ会、日中口述歴史・文化研究会、関東福井総合高校会、共産党中野区後援会、東大生協OB会、ミュージカル「わだつみのこえ」出演俳優、技橋橋ババの会、ホロピン草の会の皆さん。

*ふだんの限られた開館日時(月・水・金の一時から四時まで)をカバーするために、団体の場合は、曜日・時間等ご相談に応じます。解説もいたします。遠慮なくお申し込みください。

◆ご寄付

記念館の維持・発展のために会費(維持・賛助)やご寄付をお寄せくださった皆さま、また来館の折にカンパしてくださった皆さまに深く感謝申し上げます。ありがとうございます。

当館の管理・運営を担う「法人」理事は、設立以来無報酬で諸経費の節約に努めておりますが、維持・運営・集会・印刷等々に多額の費用が必要で、どうか今年度もご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。

◆役員・スタッフ紹介

法人の役員は五月二三日の総会で、理事長・渡辺總子、副理事長・岡田裕之、記念館館長・山辺昌彦、常務理事・岡安茂祐、奥田豊己、基快久が就任しました。
ふだんの記念館運営は、山辺昌彦、奥田豊己、基快久、深澤かよ子、渡

辺總子があたつています。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

◆夏季休館

8月16日(日)～8月30日(日)ですが、中大生の平和学習、市民の団体見学等は特別開館しますのでご相談ください。メールは休館日も受け付けております。(W)

◆新しいホームページができました◆

スマホやタブレットでも読めるよう表示されます。
※当面、旧ホームページとの併用状態になりますのでご了承ください。

新ホームページが表示されない場合は

わだつみのこえ記念館 検索

wadatsuminokoe.com
を選択してください。



認定NPO法人
わだつみのこえ記念館

記念館だより 第14号

発行日 2020年5月31日

発行 万だつみのこえ記念館

東京都文京区本郷5-29-13

電話/Fax 03-3881515-8571

URL: <http://www.wadatsuminokoe.org>

E-mail: info@wadatsuminokoe.org

URL: <https://www.wadatsuminokoe.com>

郵便振替 001800-3-612451